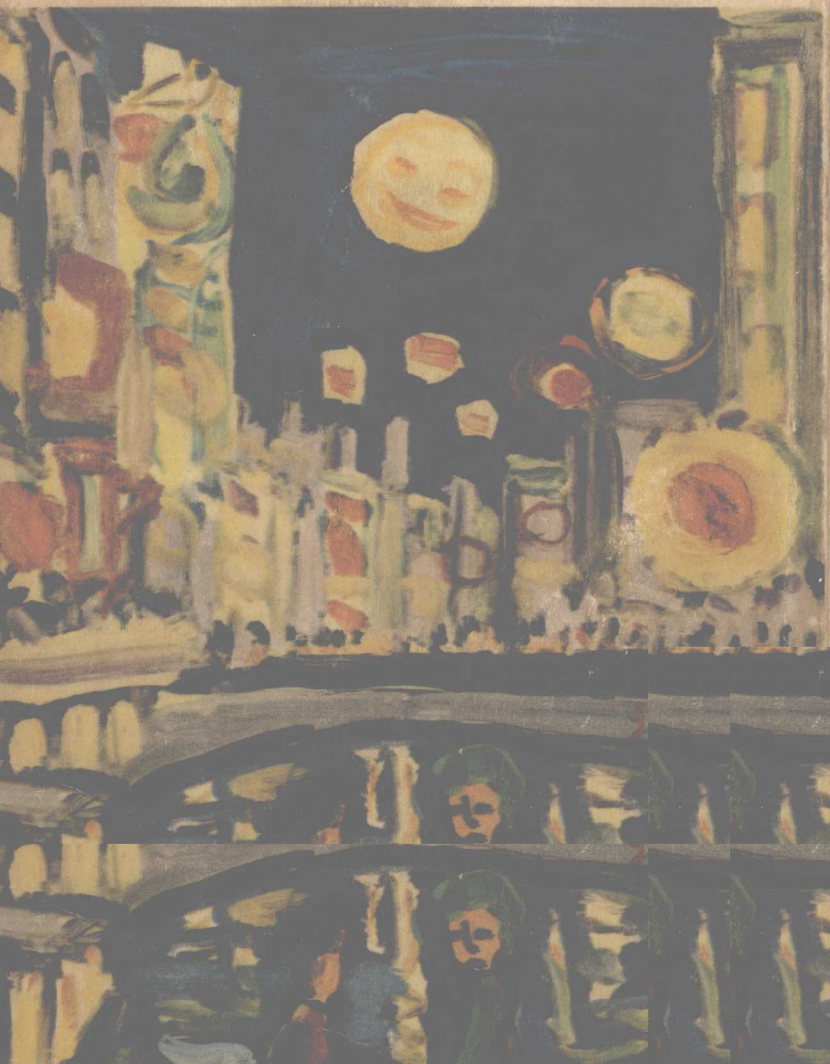
目白三平の共稼ぎ

中村武志

新潮社版



目白三平の共稼ぎ

中村武志

新潮社版

★目白三平の共稼ぎ★

定価　一四〇円

一九五七年九月十六日　印刷
一九五七年九月二十日　発行

著者　中村武志
発行者　佐藤亮一
印刷者　山元正宜
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京三四局代表七一一一—九
振替東京八〇八番

（乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。）

——小説文庫——

印刷　三晃印刷株式会社　製本　神田加藤製本所
© by T. NAKAMURA 1957. TOKYO printed in Japan

目次

目白三平の熱帯魚……五
目白三平のオペラ……二七
目白三平の共稼ぎ……四八
目白三平のかばやき……七〇
目白三平の仲人……八五
目白三平のますらお派出夫……一〇七
目白三平のサンドイッチマン……一二六

裝幀

野間仁根

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目白三平の共稼ぎ

目白三平の熱帯魚

国鉄本社八八八号室のうるおいについて目白三平が思案すること

国鉄本社八階の八八八号室は、この国鉄ビルの中で一番小さい部屋だ。ほかの部屋は最小のものでも、三、四十人は収容出来るのが普通だが、八八八号室は、目白三平を含めて七人が漸く自分の机を並べる広さしかない。

四方の壁も天井も相当汚れているし、装飾品らしいものも何一つない、至って殺風景な部屋だ。それにも拘らず、この係の七人はチームワークがよく取れていて、日々の仕事はさしたる支障もなく、スムーズに進行している。

それにしても、この八八八号室には何か不足している、と目白三平はいつも思うのだ。壁や天井がどんなにきれいであっても、この不足のものを補うことは出来ない。つまり、この八八八号室には、何となくうるおいというべきものが足りないのだ。

そのうるおいというのは、煎じ詰めて言えば、何といっても女っ気のことなのだ。男ばかり

七人の中に、たった一人の娘さんがいるだけで、随分部屋の雰囲気が変るにちがいない。しかし、その娘さんが、あまりにも魅力的な存在であっては困るのだ。勝手な注文かも知れないけれど、清潔で明朗で、七人に対していつも公平で過不足のない応対をする、賢明な娘さんでなければならない。

〃ところで女房は、「私ってものがあるではありませんか。私の方にいつも心を向けていらっしゃれば、どんな魅力的な娘さんが現われても、そう簡単に心を動かされることはありませんわ」と言うだろうが、それは人間の弱さというものを知らない者の言葉だよ。ありていに言えば、お前や子供たちはそっとしておいて、別のところで、若い魅力ある娘さんと交際して見たい気持は十分にあるんだからな。だから、こちらが抵抗出来ないほど魅力的な娘さんの出現は困るんだよ。……さて、わが八八八号室のうるおいのことに戻るのだが、今ここで一人の清潔明朗な女子職員を配属させて貰うということは、職員を減らそうとしている矢先に、絶対に不可能なことだからな。それでは、このほかにうるおいを与えてくれるものと言えば、平凡だけれど、先ず草花というところだろう。これならば女房にも文句はない筈だ。早速優しい四季の草花で、わが八八八号室を飾ることにしよう〃と、日白三平はひそかに決心した。

日白三平が小遣ではじめて花を買うこと

目白三平は、毎朝東京駅の降車口で下車し、都電の通りを越えた向う側の国鉄本社に出勤するわけだが、その降車口の右側に、鉄道弘済会経営の小さな花屋がある。

ここで目白三平は、彼のささやかな小遣をつかって花を買うことにした。四月の第一月曜日の朝であった。花屋には、カーネーション、チューリップ、デージー、ヒヤシンス、アネモネ、百合、菊、カスミ草などの花が、店先いっぱいに並べてあった。

目白三平は、立ち止まってしばらく花を眺めていた。やはり出勤前の娘さんたちが、次々と立ち寄っては、花の色をたくみに取合わせては買って行くのであった。彼はあれこれと迷った挙句、一人の娘さんと同じように、白の鉄砲百合と赤のカーネーションを一輪ずつ買った。百合が三十円、カーネーションが二十円であった。花屋の娘さんがアスパラガスを一本サービスしてくれた。

目白三平が、花束を抱えて八八八号室にはいって行くと、同僚の春山君がおやっという顔をして、

「目白君、珍らしいな。急にまた何を考えたんだね。僕らとちがって、君にはなかなか優しいところがあるんだね」

と言った。目白三平は、

「うん、何しろ部屋の中が殺風景だからね」

とだけ言っておいてから、改めて春山君に向かい、心の中で次のように呟いているうちに、

矛先は段々細君の方へ向いて行ってしまった。

〃冗談じゃないよ。春山君。君なんか僕以上にいつも優しいではないか。その優しさを表面に出すことが、君には照れくさいだけなんだ。これが、つまり我々中年男の共通の欠点だろうね。たとえば、女房に優しくしなければならない場合にも、我々は殊更そっけない素振りをして、態度は冷淡であっても、胸の中には愛情が満ち溢れているんだぞ、と考えているものなのだが、これはやはりもう少し外に表わすべきだろうね。それにしても、女房の方でも、こういう我々の照れくささを理解すべきだな。態度が冷淡だからといって、愛情がないなどと判断するのは、少し軽薄というものだろうね〃

目白三平がはじめて買って来た花は、応接用テーブルの上に、牛乳びんに挿して飾られた。殺風景な八八八号室の中にも、少しばかりうるおいが漂い出したようであった。彼は自分の計画が成功したことで、いささか気をよくしたが、それに続いて気がかりになったのは、花の寿命が幾日だろうということであった。目白家の花は、四月、五月という季節には、一週間から十日くらいの寿命であった。風通しのよくないビルディングの中では、家庭の場合よりいくらかは短いにちがいないと想像していたが、想像以上に短くて三日間しか保たないのであった。

したがって、第二回目の花の購入は、木曜日の朝であった。この日には、白の鉄砲百合に、黄色のチューリップを配して貰った。値段はやはり五十円であった。結局一週間に二回で百円、一カ月には四百円の花代が必要になるわけであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目白三平が細君に花代を請求しヤブヘビに終ること

目白三平は、この四百円の花代を、小遣のほかに特別に出して貰おうと考えた。ささやかな小遣の中から、それを支出するのは、たしかに無理であった。

「……そういうわけで、もう三週間も前から花を飾っているんだ。それで、これからは小遣のほかに、花代として四百円貰いたいのだがどうだろう」

と、目白三平は細君に頼んで見た。

「国鉄本社の八八八号室に、お花を飾るってことは、大変いいことですわ。お花のあるおかげで、あなたが一日中愉快に仕事をなさることが出来るならば、四百円は安いものですわ。でも、あなたの係は七人なんですから、花代の責任負担額は、四百円の七分の一でいいわけですよ」

と細君が言った。

「いや、花を飾ることは、誰にも相談せずに、俺が勝手にはじめたのだから、割勘で貰うわけにはいかないな。それに、たまには僕らも買って来よう、と言ってくれた時に、たいしたお金ではないから大丈夫だと断ってあるからね。今更割勘だなどとは言い出せないね」

「たいしたお金でなかったら、私に請求なさらなくてもよろしいではありませんか」

「ちょっと待ってくれ。それは行きがかり上の返事なんだ。お前には分らないかも知れない

が、男の世界では、もっと大金でも、場合によっては涼しい顔をして、気前よく使わなければならないこともあるんだ。それを理解してほしいものだね」

「お前には分らないかも知れないがって台詞を、あなたは永年お使いになっておられますが、大変御都合のいいものだと思いますわ。よく説明していただけば、私にだってたいていのことは分るつもりですわ。……また元に戻りますが、お勤先でのお弁当代は三十日分、コーヒー代も三十日分差上げてございます。ところで、実際に外でお弁当を召上がるのは、日曜を除きますと、二十四、五日ですわ。コーヒーも日曜には家でお飲みになるんでしょう。そういたしますと、その余分のお金を花代の方へ回すことが出来ると思いますわ」

と、細君がこまかい計算をしながら言った。

日白三平は、

〝そういう風に何もかも机上の計算通りになると考えることが、即ち先程俺の言った「お前には分らないかも知れないが」という言葉に、そっくりそのまま当てはまるんだよ〟

と、言いたいところを我慢して、

「よし、分った。一応そういうことにしておこう」

と、あっさり花代の請求を取消してしまった。

花の代りに生産的な熱帯魚を飼いはじめること

目白三平は、相変らず花を買いつづけていたが、気候が段々熱くなるにしたがって、花の寿命は二日間しか保たないようになってしまった。一週間に三回の百五十円ではいよいよやり切れない、と目白三平はひそかに愚痴をこぼし出していた。

七月にはいったある朝、目白三平は、朝刊の家庭欄に、熱帯魚の飼い方という次のような記事を発見した。

初心者が飼うにはグッピー（一つがい百円ぐらい）がよいでしょう。この魚は生れ出る時、卵ではなく子になっているので繁殖も容易です。グッピーの雌は、日本のメダカに似ており、雄は色々と変った色彩を持っているので、レインボウ・フィッシュとも呼んでいます。産地は南米のギアナ、ベネズエラで、成魚は一カ月に一回以上、数十尾の子を生みます。

目白三平は、これを読むと、

〃そうだ。不生産的な生花を止めて、生産的な熱帯魚のグッピーを飼うことにしよう。しかも、八八八号室に欠けているうるおいをこれで補うことが出来れば、一挙両得というものではないか〃

と思った。

国鉄本社に出勤して、目白三平が春山君に相談すると、

「熱帯魚はいいね。その一番安くて飼い易いというグッピーにしようじゃないか。目白君に

は、長い間花代を払わせたから、今度は僕が熱帯魚を買ってくるよ」
と言った。
昼休みになると、春山君は、国鉄本社からそんなに遠くない大東京デパートへ行き、グッピー一つがいはもちろん、ガラスの水槽、底へ敷く砂、水草など一揃いを買って来た。
国鉄本社八八八号室の応接用テーブルの上には、その日から日本のメダカに似た愛らしい一つがいのグッピーが、水槽の中を颯爽と泳ぎ回って、仕事に疲れた七人の者を慰めることになった。
日白三平の提案に直ちに賛成し、自分で買って来ただけあって、グッピーの世話は、殆んど春山君一人が担当した。朝夕の餌をやることから、水槽の水換えなど一度も忘れることはなかった。また、子が生れると、雌が子を食べるというので、水槽をもう一つ買って来たりした。
春山君は、一週間くらいの出張で地方へ出かけると、必ず日白三平宛に次のようなハガキを寄越した。
グッピーの餌を忘れずにやって下さい。朝夕の二回で結構です。一回の餌の量は、五分間に食べ終えるくらい。病気、特に白点病に注意して下さい。
だから、春山君が留守になると、日白三平の責任は重かった。彼の留守の間に、グッピーに万一のことがあってはならなかったからだ。日白三平は、「熱帯魚の飼い方」という本を買って来て、白点病とか、マウスファンガスとかドロフシイという一番かかり易い病気の手当法を研

究したりした。

初秋の訪れとともにグッピーの冬越しを心配すること

十月の声を聞くと、夜はかなり涼しくなって来た。目白家でも、今までの毛布一枚の上に、蒲団を一枚重ねるようになった。その晩は特に涼しかった。目白三平は、床にはいって、蒲団を肩まで引上げると、闇の中で、眼を開いた。そして、国鉄本社八階八八八号室の応接用テーブルの水槽で、寒さのために緩慢に泳いでいるグッピーの姿を、まじまじと思い浮べた。

「明日は、春山君たちと相談して、何とかグッピーの冬越しの方法を考えてやらなければならないぞ。今まで随分楽しませて貰ったのだから、殺してしまうわけには絶対に行かないね」

と、目白三平は、思わず独言を呟いてしまった。細君は、ぶつぶつと呟く彼の独言を聞き止めると、

〃また寝言を言っているんだわ。年を取ると、段々苦労性になるらしいわね。いわゆるいやがらせの年齢というのに、近づいて来たんだわ。何か叱言を言っているようだったけれど、寝言にまで叱言を言うなんて随分執念深いんだわ〃

と、考えたようであった。

目白三平は、翌朝は少し早目に出勤した。彼が八八八号室にはいって行くと、既に春山君が

出勤していて、グッピーに餌をやっているところだった。グッピーは、昨夜日白三平が心配したほど弱ってはいなかった。いつものように、水槽の中を素早く泳ぎ回っていた。

昼飯が済むと、春山君が、

「ちょっとみんな集まってくれないかな。相談したいことがあるんだ」

と言った。

グッピーのテーブルを囲んで、全員が集まった。

「相談というのは、グッピーのことなんだけれど、昨夜は随分涼しかったね……」

と、春山君が言った。

「そうなんだ。実は僕もグッピーが心配だったんだ」

と、日白三平が言った。後の五人も、昨夜はみんなグッピーのことを思い出したと言った。

「皆さん、どうも有難う。それで相談というのは、この冬をどうして過させたらいいか、その方法を考えていただきたいのです」

と、春山君が少し改まった口調で、みんなの意見を求めた。

目白三平を含めて六人の者が、次のような意見をそれぞれ述べ立てた。

第一の意見

「保温器を設備して、八八八号室で冬を越させながら、今まで通りみんなで鑑賞したらいい」

第二の意見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb